

お茶うけ 第42話

「人が生きることの悲しさ」

- - 映画『もののけ姫』を観て(1)

1997年7月に封切られてから、空前のロングランを続けて、1998年2月現在も放映されている映画『もののけ姫』(宮崎 駿監督作品)をおよそ半年前に観ました。まだ上映中ですが、新聞や雑誌にこう概が書かれており、観た方も多いと思いますが、私の感じたことを書くことにします。

これは、日本の中世から近世に移る世の中が混沌とした時代に、地方の山中で、それぞれに自分たちの集団を守って生きる人々と獣たちの物語です。その中の主だった3人の生きざまを紹介します。

アシタカは、北の果てに住むエミシー族の長になるはずの少年でしたが、自分の村を襲ったタタリ神(石火矢で深手を負った苦しみと憎しみでタタリ神に変身した猪神)を、村人を救うために、やむを得ず射殺します。その時、自らも傷つき、タタリ神の呪いに体を蝕まれて死ぬ運命を背負いこみます。西国の深い森に住むシシ神が呪いを解く力を持つと聞いて、はるばる出雲の国の辺りまで旅をします。

エボシ御前は、タタラ衆と呼ばれる砂鉄から鉄を精錬する作業集団を率いる沈着、冷静で勇敢な女性です。その集団の人々は、世間では賤しめられ、疎外され、抑圧されていたところを、エボシ御前に救い出され、仕事を与えられ生き生きと生活できることを深く感謝しています。しかし、エボシ御前のタタラ場は、砂鉄を採るため山を崩し、炉の火を燃すため森の木を切り倒し、自然を破壊することから、森の獣たちや周囲の農民の強い敵意の的になっています。エボシ御前たちは、「カソウ」という銃(石火矢)を作って、獣や侍や農民たちの襲撃に備えます。

「もののけ姫」と呼ばれるサンは、「モロの君」という人の言葉を話す賢い巨大な犬神に育てられた少女で、多くの獣とシシ神が住む豊かな森を破壊する人間どもをひどく憎み、たびたびエボシ御前のタタラ場を果敢に襲撃します。

その地に来あわせたアシタカは、サンとエボシ御前の間の戦いを止めさせようと努めます。

深い森に住むシシ神は、昼は人の顔をして多くの角を持つ大きなカモシカの姿を、夜は半透明の体の表面に不思議な模様がある背丈10数メートルの巨人の姿をした、森のすべての生命を生殺与奪する力を持った神獣で、森の守り神と言えます。シシ神の首は、不老不死の力を持つといわれ、人間に狙われています。シシ神は、瀕死のアシタカの命を救いますが、その後、人と獣の争いの中で、その首をエボシ御前の銃で射抜かれます。

『もののけ姫』を観て、私は、村人を守るためタタリ神を殺して呪いを受けるアシタカと、虐げられた人々を助けるためタタラ場を作ったことでサンと獣の襲撃を受けるエボシ御前や、森の獣を守るために人を襲撃するサンの、それぞれの真摯な生き方に共感を覚えました。しかし同時に、この人々が自らの集団を守ろうとすることが、人と人、人と獣の間の憎しみと争いの原因となって、相手の生命を奪い森を破壊してしまう、人間の罪深い業(ごう)に気づかされました。この映画は、この深刻な難しい問題を、単純な善と悪で割り切って解決を与えるのではなく、問題提起の形で観客一人一人に問いかけます。

私は、人が生きることの悲しさを深く感じました。

この作品は、また映画芸術の面でも非常に優れていて、物語の舞台になる森を美しい奥行きのある画面に丹念に描き上げてあり、バックに流れる音楽と主題歌『もののけ姫』の素晴らしさ、選りすぐりの声優たちの巧みな台詞などが、感動をより一層高めてくれました。

以上

参考資料:

パンフレット 『もののけ姫』 宮崎 駿監督作品

『宮崎 駿と『もののけ姫』とスタジオジブリ』 キネマ旬報 臨時増刊

No.1233 1997年9月2日号